



努力の壺(つぼ)

子どもたちは、「勉強が分かるようになりたい。」「いろんなことができるようになりたい。」という願いをもって学校に通って来ています。そして頑張る中で、分からなかった勉強が分かるようになったり、できなかったことができるようになったりします。少しの頑張りでもよいときもあれば、頑張っても頑張ってもなかなかできないときもあります。



漢字覚え、ローマ字、算数の計算や文章題、鉄棒の逆上がり、クロールや平泳ぎ……。 「分からない」と「分かる」、「できない」と「できる」には大きな開きがあります。しかし、「分からない」と「分かる」、「できない」と「できる」はつながっていて、その間には、「力が蓄えられている状態」があると考えることができます。その説明でよく使われるのが「**努力の壺**」の話です。

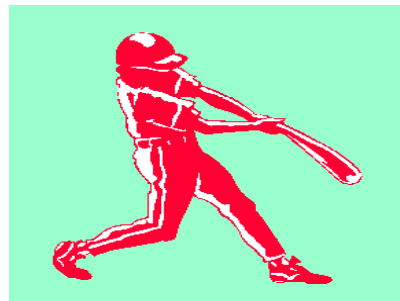
人が目標に向かって努力をするとき、内部に『努力の壺』が用意されます。努力するたびに、その壺の中に努力が蓄積されていきます。そして、壺が一杯になると、分かるようになる、できるようになる、

という話です。鉄棒が急にできるようになった子は、練習している間に、少しずつ努力がたまっていったのです。算数が分かるようになった子も同様です。

しかし、この『努力の壺』には、二つの困った点があります。一つ目は、『努力の壺』は外から見えないということです。見えないから、努力がたまっている様子が分かりません。努力しても努力してもできないとき、それは自分にとって一番つらいときです。そのため、あと少しの所であきらめてしまうことがあります。しかし、もしかするともう少しで『努力の壺』はいっぱいになっていたかもしれません。自分の『努力の壺』を信じて、最後までやりぬくことが大切です。

二つ目は、『努力の壺』は場合によってサイズが違うということです。小さい壺の場合は少しの努力ですぐにできるようになります。一方、大きい壺の場合はいくら努力を重ねても、なかなかできるようになりません。目標を達成するまでに時間がかかります。では、“大きい壺はだめなのか”という、そうではありません。壺が大きいと、努力を積み重ねる過程で、自分を鍛えることになります。壁にぶつかってもへこたれない、やりぬく強さを養っています。社会にはこうしたタイプで、成功を収めている人がたくさんいます。

例えば、元プロ野球監督の野村克也さんです。野村監督は、ドラフトではなく、テスト生として入団し、努力に努力を重ねて名捕手と言われるようになった人です。器用ではないのでバッターとしても、自分の読みと違うボールがくると一つも打てません。そこで生み出したのがID(アイディー)野球です。徹底的に相手投手のくせや球種を分析します。すると読みが当たり、打てるようになります。野村監督はこんな風に、ずっと努力を重ねてきました。つまり『努力の壺』に努力を蓄え続けました。だから自分の経験から努力の仕方を選手に教え、弱小チームと言われるチームを優勝できるチームにまで導くことができたのだと思います。



今、子どもたちは「水泳学習」の真っ最中です。早小の子どもたちも、自分の「**努力の壺**」の存在を信じて、努力を蓄え続けてほしいと願っています。「分かった!」「できた!」の歓声と笑顔を楽しみにしています。

最後に、これからジメジメとした蒸し暑い日が続くと予想されます。体調管理には十分気をつけて、学校生活を送ってほしいと願っています。保護者の皆様、お子様の健康管理よろしくお願いたします。